『リトル・アマル・ウォーク』（ニューヨーク・ハーレム）　© The Walk Productions / Respective Collective

［アメリカ］

演劇界の再編へ

外岡 尚美

2021年8月にブロードウェイの劇場は本格的に再開したが、シーズン前半にはCOVID-19感染による上演キャンセルが頻発し、さらに中盤になってもオミクロン株による感染者急増の影響で、多くのすぐれた舞台が閉幕を余儀なくされた。とはいえ、演劇界における不平等や不公正を是正しようとする昨シーズンから続く試みが牽引する形で、シーズン全体としては豊かな演劇的成果をもたらした。特にアフリカ系演劇人の活躍は目覚ましく、ブロードウェイにおける多数の新作上演やリバイバル上演だけではなく、トニー賞受賞やリージョナル・シアター発の舞台のピュリツァー劇作賞受賞などが続いた。劇作だけではなく、リージョナル・シアターでの芸術監督の交替やリーダーシップの再編成が進み、演劇界の組織と芸術的価値基準において、より多様で多元的なビジョンが提示される可能性の素地が作られつつあると言えるだろう。

アフリカ系女性劇作家たちの活躍

アフリカ系演劇人の作品では、ブロードウェイ再開第一作となった8月のアントワネット・ヌワンドゥ（Antoinette Nwandu）の『パス・オーバー（Pass Over）』（2022年版に記載）に続いて、まず11月に幕を開けたアリス・チルドレス（Alice Childress、1916-1994）の『トラブル・イン・マインド（Trouble in Mind）』（ラウンドアバウト・シアターカンパニー［Roundabout Theatre Company］）を特記すべきだろう。1955年にオフ・ブロードウェイで初演され、ブロードウェイで上演を予定されながら、プロデューサーに要求された書き直しをチルドレスが拒否したことで、ついに上演されることのなかった作品である。白人男性演出家と黒人・白人俳優たちのリハーサル風景を描くバックステージ・コメディだが、演出家には決して逆らわず、おもねることがサバイバル・テクニックにならざるを得ない黒人俳優たちの姿を自虐的笑いに包んで描く。「反リンチ劇」をブロードウェイで上演しようとする〈意識の高い〉演出家だが、彼の要求する演技はまさに類型的で愚かな黒人像であり、主役のウィレッタは自分では信じることのできない登場人物の言葉や行為に同一化することを要求される。2020年6月に公表されたオープン・レター「親愛なる白いアメリカ演劇へ（Dear White American Theater）」で可視化された、演劇の現場での階層秩序と意識化されない人種差別や白人至上主義が問題となっている現在、1955年のこの劇は〈公正なつもり〉の白人の鈍感さと、その中で消耗していく才能を描いて、今も変わらぬ痛みを捉えた。

人種関係や分断は所与のものとしても、その中での道徳的想像力を主題とした舞台も印象に残る。11月にはリン・ノッテージ（Lynn Nottage）の『クライズ（Clyde's）』（ヘイズ劇場［Hayes Theater］）、2022年1月にはドミニク・モリソー（Dominique Morisseau）の『スケルトン・クルー（Skeleton Crew）』（サミュエル・J・フリードマン劇場［Samuel J. Friedman Theatre］）が上演され、共に2022年のトニー賞劇作部門にノミネートされた。『クライズ』でのダイナーで働く元受刑者たち、そして『スケルトン・クルー』での工場閉鎖を前にした自動車産業の労働者たち、ほぼ全員がアフリカ系やヒスパニック系の人々だが、それぞれが選択の幅のほ

アリス・チルドレス作『トラブル・イン・マインド』
（ラウンドアバウト・シアターカンパニー）　撮影：Joan Marcus

とんどない状況を生きる。

ペンシルヴェニア州レディングのトラック・ドライバー向けダイナーを舞台にした『クライズ』のキッチンでは、刑務所から出所してきた4人がサンドイッチを作る。窃盗や薬物売買、強盗などの前科をもつアフリカ系やヒスパニック系の3人に、白人至上主義者の入れ墨をした白人青年も加わるが、彼らに君臨するのは同じく元受刑者の店主クライドである。彼らのような「能なしを雇うのは私だけ」「苦しみに無関心じゃないけど」「お情けはかけないよ」、といった強烈な言葉で情け容赦なく4人を牛耳り、笑いを誘う。ウィットに富むやりとりのなかでもアメリカの刑務所システム、薬物中毒、貧困、ホームレスといった問題が描かれるが、核心にあるのは彼らが一歩前に進むためにどのような選択をするのかという道徳的想像力の問題であり、この舞台では美味しいサンドイッチを作るという夢が、そのような想像力の根源となる。

またデトロイトを舞台にしたデトロイト三部作の一作『スケルトン・クルー』においては、工場閉鎖を目前にした現場主任レジーの苦悩と年長の労働者フェイの選択に、そのような想像力を見出すことができる。管理職の末端に属するとはいえ自分自身も職を失うことを恐れながらレジーは労働者を守ろうとし、退職後の手当が一気に有利になる〈勤続30年〉を待つばかりだったフェイは、レジーと同僚の若い2人を守ろうとする。闘病、息子の離反、恋人の死、ホームレスといった苦境にもかかわらず、フェイは結末で自己犠牲とも言える選択をする。かつてノッテージはピュリツァー劇作賞受賞作『スウェット(Sweat)』(2015年初演)で、工場閉鎖を前に差別意識や自己保存のために労働者たちの連帯が崩壊する厳しい状況を描いたが、それと同じ状況を描きながらモリソーは、口は悪いがあたたかみのあるやりとりを通して、限られた選択肢のなかでも人間相互の連帯と倫理的な選択の可能性があることを描いた。『スケルトン・クルー』は2016年オフ・ブロードウェイで初演、2022年のブロードウェイ上演は1月のオミクロン株による感染拡大のなかで大きな痛手を受けながらも、フェイ役のフィリシア・ラシャド(Phylicia Rashad)はトニー賞の助演女優賞を受賞した。

アフリカ系の人々の体験と人種関係の再検討

10月には、『スケルトン・クルー』の演出も手がけたルーベン・サンティアゴ=ハドソン(Ruben Santiago-Hudson)作・演出・主演の自伝的一人芝居『ラッカワナ・ブルース(Lackawanna Blues)』(マンハッタン・シアター・クラブ)、ダグラス・ライオンズ(Douglas Lyons)の『チキン&ビスケット(Chicken & Biscuits)』(サークル・イン・ザ・スクエア劇場)、キーナン・スコッツ2世(Keenan Scots Ⅱ)の『ソーツ・オブ・ア・カラードマン(Thoughts of a Colored Man)』(ジョン・ゴールデン劇場)と、アフリカ系演劇人の作品が次々と幕を開け

た。とりわけ『ラッカワナ・ブルース』は、サンティアゴ＝ハドソン１人で25人を演じ分ける演技と語りの魅力が話題になった。50年代のニューヨーク州ラッカワナの「ナニー」と呼ばれたタフで愛情豊かな女性とコミュニティを描くこの作品は、2001年のパブリック・シアターでの初演ののち、HBOによって映画化もされているが、今回の公演は、１人の俳優と劇の空間を共有することで立ち上がってくる時代と場所の濃密な空気を改めて感じさせるものだった。

さらに2022年のピュリツァー劇作賞はジェームズ・アイムズ（James Ijames）の『ファット・ハム（Fat Ham）』に贈られた。2021年の４月から５月にかけて、フィラデルフィアのウィルマ劇場（Wilma Theater）から配信されたという点で異色の受賞である。南部のバーベキュー・レストランを営む黒人家族の息子ジューシーが、父の亡霊から叔父に復讐するように促される。しかし『ハムレット』とは異なり、ゲイで優しいジューシーは過去からのトラウマと暴力の連鎖を断ち切っていく。『キル・ムーヴ・パラダイス（Kill Move Paradise）』（2017年初演）で人種差別社会での黒人男性の悲劇を描いたアイムズだが、この喜劇では「人を害することより喜びを選んだら（if you chose pleasure over harm）」どうなるかと問いかける。2022年５月からパブリック・シアターでも公演された。

またトニー賞のミュージカル部門はマイケル・R・ジャクソン（Michael R. Jackson）脚本・作詞・作曲による『ストレンジ・ループ（A Strange Loop）』（ライシアム劇場［Lyceum Theatre］）に。ゲイの黒人アーティスト、アッシャーが直面する内的葛藤や矛盾――ゲイのアイデンティティと欲望、白人男性との関係、両親との葛藤、野心、不安など――が、彼が

ジェームズ・アイムズ作『ファット・ハム』（ウィルマ劇場）の配信映像から

ミュージカルを書き上げるなかで6人に実体化された「思考（Thoughts）」とのやりとりで痛烈に表現される。2019年にオフ・ブロードウェイのプレイライツ・ホライズン（Playwrights Horizons）で公演、2020年のピュリツァー劇作賞に引き続いての受賞となった。

そして再演では2022年4月のヌトザケ・シャンゲ（Ntozake Shange、1948-2018）による『死ぬことを考えた黒い女たちのために（for colored girls who have considered suicide/when the rainbow is enuf）』（ブース劇場［Booth Theatre］、1976年初演）。虹の各色をまとい、それぞれ色の名を帯びた女性たちがその痛みや喜びを歌う詩をのびやかに語り踊る。「舞踊詩」とシャンゲが名付けた斬新な形式と、レイプや妊娠中絶、家庭内暴力のほか、黒人女性たちの夢や希望も率直に歌い上げ、今の女性たちの心にも響く記念碑的作品である。2019年にもパブリック・シアターで再演されたばかりだが、今回の公演ではパブリック版の振り付けを担当したダンサーのカミール・ブラウン（Camille A. Brown）が演出も担当。冒頭から言葉、動き、音楽が一体化し、ダンスが複数の女性たちの語りをつなぎ、「感情や物語を感知するための第二の経路を作り上げていた」（『ニューヨーク・タイムズ』紙）と高く評価された。再演部門と演出部門を含む7部門でトニー賞にノミネートされたが、観客数が伸びず、予定されていた8月14日よりはるかに早い6月5日で閉幕を余儀なくされた。

またミュージカルでは2021年10月のトニー・クシュナー（Tony Kushner）脚本、ジニーン・

ヌトザケ・シャンゲ作『死ぬことを考えた黒い女たちのために』（ブース劇場）　撮影：Marc J. Franklin

テソーリ（Jeanine Tesori）作曲による『キャロライン、オア・チェンジ（Caroline, or Change）』（スタジオ54、2005年初演）が、1963年の南部を舞台に、ユダヤ系の家族と黒人メイドのキャロラインの関係を描いて時宜を得た再演となったことも付け加えておきたい。

観客数の減少と芸術監督の交替

アフリカ系演劇人の活躍は目覚ましいが、『死ぬことを考えた黒い女たちのために』だけではなく、パンデミック以降の観客数の減少は多くの舞台を直撃した。観光客の減少、同じ時期に多くの公演が幕を開けたことによる観客の分散、リモートワークの影響で劇場街近辺のオフィスに人が完全には戻っていないこと、さらに長期間の巣篭もりの結果ナイトライフのスタイル自体が変化したこと、などが原因とされている。わずかに『ハリー・ポッターと呪いの子』が2022年7月以降健闘しているが、『ハミルトン』のようなヒット・ミュージカルでさえ2022年1月から7月までの週あたりの収益はパンデミック前のおよそ50％近くまで落ち込んでいる（『ニューヨーク・タイムズ』紙、2022年8月21日）。オフ・ブロードウェイ発の実験的な舞台――ティナ・サッター（Tina Sutter）による『イズ・ディス・ア・ルーム（Is This A Room）』やルーカス・ネイス（Lucas Hnath）の『デイナ・H（Dana H.）』（主演のディードル・オコンネルはトニー賞の主演女優賞を受賞）――などの優れた舞台もプレビュー公演を含めて2か月弱で閉幕、『ストレンジ・ループ』でさえ2023年1月には閉幕することが発表された。

『オペラ座の怪人』も2023年1月に35周年を迎えた後、4月に閉幕するが、プロデューサーのキャメロン・マッキントッシュは「世界が変わった」と述べている。確かに、パンデミックと分断の経験を通して、時代の感性も変わりつつあるのだろう。冒頭で述べたように、各地の有力なリージョナル・シアターで芸術監督の交替が2019年前後から進んでいる。ニューヘイヴンのロングワーフ・シアター（Long Wharf Theatre）、ルイヴィルのアクターズ・シアター（Actors Theatre of Louisville）、ボルティモア・センター・ステージ（Baltimore Center Stage）などはその一部である。数十年にわたって一人の（たいてい白人男性の）芸術監督の強力なビジョンとリーダーシップによって運営されてきた劇場が、ヒスパニック系やアフリカ系、そして女性の芸術監督を迎え始めたのである。フィラデルフィアのウィルマ劇場は2020年より、（チェコ出身の女性で劇場創設者・芸術監督のブランカ・ジシュカ［Blanka Zizka］から）ジェームズ・アイムズを含む3人の芸術監督が毎年交代する独特な体制をとり始めた。体制の変化により年間のプログラムやキャスティングだけではなく、資金の調達、観客や演劇の上演形式自体の変化が予想される。このようなリージョナル・シアターの変化が今後どのような演劇を生み出すことになるのかはこれから見ることができるだろう。

感受性を変容させる演劇の可能性

世界の変化への鋭敏な感受性は、パンデミック以降のアメリカ演劇界における様々な試みにも現れている。2022年９月14日から10月２日まで、イギリスのウォーク・プロダクションとブルックリンのセント・アンズ・ウェアハウス（St. Ann's Warehouse）の共同制作で、〈10歳のシリア難民の少女リトル・アマル〉がニューヨーク市各地を訪れた。3.5メートルという巨大なパペットのアマルは、離れ離れになった母を探して2021年７月にシリア国境に近いトルコの街を出発し、13か国9,000ｋmを旅してきた。『ウォー・ホース（War Horse）』のパペットで知られる南アフリカのハンドスプリング・パペット・カンパニー（Handspring Puppet Company）の協力で作られ操作されるアマルは、難民キャンプや各地で計画されたイベントを訪れるが、その周囲にはアマルを追って歩く大人や子供が集まり、祝祭的野外劇ともなる。ヨーロッパでは反難民感情をあらわにした都市もあったようだが、ニューヨークにおいてはメトロポリタン・オペラやラ・ママ、リンカーン・センターなど数多くの組織がパートナーとしてリトル・アマルを歓迎するイベントを行った。ウクライナ情勢が厳しさを増し、アメリカ国内に反移民感情もあるなか、難民の子供たちの人権や希望を喚起する「ウォーク」は、演劇が世界と関わる先端部であり、人々の感受性に（わずかながらでも）変容をもたらし得る可能性を指し示している。

そのような可能性を開く劇として不法移民の若者二人

『リトル・アマル・ウォーク』（ニューヨーク・タイムズスクエア）
© The Walk Productions / Respective Collective

マーティナ・マイオーク作『サンクチュアリ・シティ』（ルシール・ローテル劇場）
撮影：Joan Marcus／写真提供：New York Theatre Workshop

を描いたマーティナ・マイオーク（Martyna Majok）の『サンクチュアリ・シティ（Sanctuary City）』（2021年９月、ルシール・ローテル劇場［Lucille Lortel Theatre］）もある。またプレイライツ・ホライズン公演の、2013年のカブールを舞台に元アメリカ軍通訳の不安な日常を描くシルヴィア・クーリ（Sylvia Khoury）による『セリング・カブール（Selling Kabul）』（2021年11月）、そしてダウン症の女性と異母兄弟や友人との間でケアすること、されることを描いたウィル・アーベリー（Will Arbery）による『コルシカーナ（Corsicana）』（2022年６月）も、世界への感受性を開くものだろう。

ソンドハイムの死と古典作品の改変

2021年11月にはミュージカル界の巨星スティーヴン・ソンドハイム（Stephen Sondheim、1930-2021）が亡くなった。ソンドハイムの『イントゥー・ザ・ウッズ（Into the Woods）』（セント・ジェームズ劇場、1987年初演）は2021年７月から８月まで短期間の再演。また『カンパニー（Company）』（バーナード・B・ジェイコブズ劇場［Bernard B. Jacobs Theatre］、1970年初演）は、30代で結婚しない男性という設定の主人公を女性に変えて2021年12月から再演された。単なるクロスジェンダー・キャスティングではなく、ソンドハイムの承認のもと設定自体を組み替えての再演だった。トニー賞の再演ミュージカル賞を受賞。アメリカ演劇界の広い裾野から進む再編の波のなかで、『カンパニー』のような古典的ミュージカルもまた、同じ上演ではあり得ないということだろう。この変容のなかで今後どのような舞台が生まれてくるのか、注目したい。

とのおか・なおみ

青山学院大学教授。演劇学Ph.D. アメリカ演劇専攻。著書に『境界を越えるアメリカ演劇』（共編著、ミネルヴァ書房）、『たのしく読める英米演劇』（共編著、ミネルヴァ書房）、『戦争・詩的想像力・倫理』（共編著、水声社）他。訳書にイヴ・セジウィック『クローゼットの認識論』（青土社）他。